



## 左遷も悪くない 2

α L P H H L I G H T

霧島まるは  
*Maruha Kirishima*



アルファライト文庫 

## 目次

第1章 わがまま娘と伊達男だておとこ 7

第2章 敵と味方 155

番外編 エルメーテの日記 283

# 主な登場人物



ウリセスⅡアロ 29歳  
↓↑  
実直すぎてド田舎に左遷された主人公。  
眼光鋭い優秀な軍人。



ヴァレリアⅡアロ 22歳  
↓↑  
ウリセスに嫁いだ貞淑な女性。  
愛称はレリア。  
父の命を助けたウリセスの話を  
繰り返し聞かされて育った。

イレネオⅡコンテ 20歳  
↓↑  
コンテ家三男。  
体力も剣もそこそこの兵士。  
兄弟で一番空気が読める。



エルメーテⅡバラッキ 23歳  
↓↑  
ウリセスの補佐官。  
要領のいい好青年だが、  
いささか腹黒い。



ジャンナⅡアロ 16歳  
↓↑  
ウリセスの妹。  
甘ったれのわがまま娘。

ルーベンⅡコンテ 25歳  
↓↑  
コンテ家次男。軍の小隊長。  
剣の腕は見事だが、  
それ以外は多くの難あり。



トビアⅡコンテ 26歳  
↓↑  
コンテ家長男。

役人だが、  
予備役でもある。

セヴェーロⅡコンテ 19歳  
↓↑  
コンテ家四男。  
ウリセスに憧れて軍人となったが、  
体力が無い。

第1章 わがママ娘と伊達男<sup>だておとこ</sup>

## 1 冬を待つ女

「レーア義姉さん、冬が来るわ！」

この家の主であるウリセスⅡアロを見送った後、彼の妹にして居候であるジャンナが、レーアことヴァレリアⅡアロに、ピシッと冬季の到来を告げる。

ウリセスは、この地域の軍の総司令官という肩書きだが、その実情は上層部に睨まれて左遷された、というものだった。

そんな左遷された男は、二ヶ月と少し前の秋の日にこのレミニの町に住むレーアと互いの顔も知らぬまま結婚した。バタバタとめまぐるしく過ぎた秋の日々は、まだ色鮮やかにレーアの記憶に残っていた。

「そうね、明後日から冬ね。冬朔の日は、何かおいしいものを作りましょうね」

気合の入った義妹の様子に少し気圧されながらも、レーアは暦の上で季節が変わることを確認して頷いた。

アロ家の玄関から入った突き当たりには柱時計があり、その横の壁に神殿が作成した一

年の暦がかけてある。日付の他に、祭事などが書き記されている一枚ものの紙だ。年の初めの頃に、神殿に寄進をした時にもらえるものだった。

各季節の入りである上月の一日目は朔といい、ここミルグラーフ王国では新しい季節を祝う祭りとされている。この国の首都では、東西南北にある大きな神殿が、それぞれ春・秋・夏・冬の季節を祝う神殿祭を分担して行っていた。だが、南西の辺境であるこのレミニの町には、神殿がひとつしかない。そのため、規模は小さいものの、そこがすべての朔の日の祭りを取り仕切っている。

「私は、いつも南の神殿に行ってたのよ」

都生まれのジャンナが、暦を眺めながら昔を懐かしむような声を出す。

朔の日、それぞれの季節に生まれた子供たちは十歳になるまで、神殿から祝いの菓子をもらうことが出来る。これが、子供たちにとっては何よりの楽しみだった。ジャンナは夏季の生まれだったので、夏朔の日に南の神殿に通っていた、というわけだ。

同じく都生まれのレーアもそのことを思い出した。都に住む子供たちは、神殿ごとに派閥を作って、北の神殿派だの、東の神殿隊だの、ごっこ遊びの組み分けなんかによく使っていた。

「私は東の神殿だったわ」

東の神殿にかけられるタペストリーの色は、緑。春生まれのレーアもまた、春朔しゅんげくが楽しんでしまうがなかった。

この国の新年は、春朔である。そのため、午前中は神殿で春朔の祭事が、午後には盛大な新年祭が、国の行事として執り行われる。春生まれの子にとっては、朝から夕方まで祭りで浮かれる日だった。

末弟のセヴェーロも、レーアと同じ春季の生まれ。昔は仲良く手をつないで、母親に連れられて東の神殿へ通っていたものと、彼女は懐かしい記憶を呼び戻していた。

母と長男トビアは秋季生まれで西の神殿で、タペストリーは黄色。父と次男ルーベン、三男イレネオが夏季の生まれで南の神殿。タペストリーは赤。春夏秋に生まれの季節が固まっていたため、コンテ家にとっては冬朔が一番地味な祭日だ。そのため、レーアは北の神殿にはほとんど縁がなかった。白いタペストリーにかかるそこは、少し縁遠いところであつたのだ。

その、無縁な祭日は、

「ウリセス兄さんは、北の神殿組だったのよ」

ジャンナの一言で、一気にレーアの目の前に迫ってきたのだった。

レーアは、市場で大きなカブを買った。その帰り道、料理屋に働きに出て来た母と偶然に会い、少し話をした。冬朔のカブ料理について、女同士で語り合う。

カブは、冬朔を祝う野菜の中で、一番有名なものだ。とろとろに煮込むシチューにも、あつさり煮るスープにも向いているそれは、冬朔の直前に飛ぶように売れる。次に売れるのが白菜。

ちなみに春はキャベツが多い。そら豆派も負けじと主張しているが、いまだ劣勢れつせいだった。夏はカボチャが一番強い。よその国から種が持ち込まれたトマトなる野菜が食い込みつつあるらしいが、まだまだ作っている地域が少ないため、レミニの町には無縁の話だった。

秋はジャガイモ派とサツマイモ派との間で毎年熾烈しちれつな争いが続き、秋生まれの人間が複数集まると、イモ戦争が勃発はつぱつすることもある。

ともあれ、冬朔の日にはおいしいカブのシチューを作ろうと、レーアは張り切っていた。初めて来るウリセスの誕生季でもあり、結婚して初めて一緒に迎える新しい季節なのだから。

「冬朔は、お仕事ですか？」

その夜レーアは、寝室でウリセスの予定を聞いてみた。いつも離れて着替えをする時の、

気軽な雑談にまぎれこませる。

結婚してこれまで、彼は仕事を休んだことがない。豊年祭や新年祭は、町をあげてのお祭りなので軍も忙しいだろうが、冬朔は違う。神殿が中心の、どちらかというと家庭的な祭日である。だから、休めるのではないかと思っただのだ。

「ああ、冬朔か……」

いま思い出したように、ウリセスが呟く。祭日とは言え、軍から誰もいなくなるわけではない。レーアの兄弟たちも、いつもより休める確率は高かったものの、仕事に行く時もあった。

ウリセスは、しばらく沈黙していた。レーアは気になって、寝巻きに頭を通しながら振り返る。彼は物思いにふけっているのか、肌着のまま少し顎を上げて動きを止めていた。

自分の誕生日だ。きつと思ひ出もあるだろう。レーアにとっては無縁の神殿に、小さなウリセスが通っている姿は、残念ながら彼女には想像出来ない。小さなウリセスというのは、彼女の想像力では到達出来ないところにあった。レーアは、ウリセスの大人の姿しか知らない。どんな子供時代を送り、何を考えていたか。それは思い出話でしか共有出来ない、古い過去の物語だ。

そんな彼が、肩越しにふっとレーアの方を振り向いた。不意に視線を向けられてどきつ

とした彼女は、寝巻きを整えているフリをした。彼の子供の頃を想像しようとしていたなんて、気づかれることはきつとないだろうが。

「……冬の生まれか？」

視線を一度合わせた後、ウリセスはその身体をもう少しレーアの方へと振り向かせてから聞いた。

「え？ 私ですか？ いいえ、私は東の神殿ですよ」

都生まれにしか通用しない言葉で、彼女はふふと笑って返した。数少ない、彼との共通点だ。きつとこれで、春生まれであることはすぐに分かってくれるだろうとレーアは思った。

「そうか……冬朔は仕事に出る」

しかし、ウリセスは彼女の笑顔に視線で応えてくれたものの、言葉はつれなかった。そして彼は、肌着に手をかけて着替えの続きに戻ってしまった。

「仕事、お忙しいんですか？」

少し残念に思っ、レーアは思わずそんな小さな抵抗を口に出していた。

秋の初めに結婚して、もはや冬になろうとしているのだから、三ヶ月近く休みなしという計算になる。そんな勤務は、レーアの兄弟もしたことがない。夜の勤務など変則的な部

分もあるが、一ヶ月に四、五日ほどは休みがあった。

いくら連隊長という大変な肩書きだったとしても、さすがにウリセスは働きすぎではないだろうかと、彼女も心配だった。

「いや、いつも通りだ」

それは、解釈に困る返事だった。いままで一日も休んでいない状態で「いつも通り」と言われたら、常に忙しいという意味にも取れる。

「たまには、お休みになった方が……」

レーアは、言葉をにじり寄せた。これまで、彼女は夫の仕事に関して口出しをしてこなかった。どこまで言っているのか分からず、彼女は言葉を少しづつウリセスに近づけながら、その表情を窺い見る。

そんなレーアの声は、さすがに夫に疑問を抱かせたのだろう。「冬朔に、何かあるのか？」と、問い返されてしまった。その日に何か予定があって、ウリセスの休みを望んでいると勘違いしたようだ。

寒くなってきたというのに、ウリセスは下穿き一枚で寝台へと向かっている。いつものことなので、レーアもその光景には大分慣れてしまった。しかし、ぼーっと見ているわけにもいかず、着替えを済ませた彼女もまた、慌てて寝台の反対側へと歩きながら、ウリセ

スの誤解を解くべく言葉を探した。

「あの……ウリセスの誕生日が、冬だとジャンナから聞いて……」

寝台に手をかけた状態で、彼は動きを止めてレーアを見た。彼女もまた寝台の前で足を止めた。

「祝ってもらう年でもないぞ」

ウリセスに真顔でそう返されて、レーアの方が恥ずかしくなってしまった。仕事と私事を、ごっちゃにしたと思われたのだろう。

「いえその、お祝いとかそういうのじゃなくて、あの……あ、お祝いしたくないって意味じゃないですよ……そうじゃなくて、ああもう……ずっと働き詰めでいらっしやるから、たまにはゆつくりお休みになった方がいいんじゃないかと……あっ、風邪をひくといけませんから中へ」

恥ずかしさに顔を赤らめながら、彼女は必死に言い訳を並べようとした。じっと見られるのも辛いので、掛布の中へ彼を誘う。

「あ、あと、ジャンナが冬物の服を欲しいと……あまりたくさん持つてきていなかったようです」

一緒に掛布の中に潜りながらも、レーアは言葉を止められなかった。変に思われたので

はないかと感じると、なおさら慌てて取り繕おうと必死になってしまう。底の抜けた樽のようだと、レーアは自分を恥ずかしく思った。

「いくらかは貸せるのですが、ジャンナは背が高いので、私の服では可哀相で」  
ウリセスの妹であるジャンナは、実家を継いだ長兄ランベルトとケンカをして家を飛び出してきた。都から駅馬車で七日離れたこの家に来た時には、大きな旅行鞆ひとつ抱えただけの状態だった。持って来た服は多くはなく、ジャンナはそれをよくレーアにばやいていた。

冬朔の休みの話が、いつの間にかジャンナの衣装の件にすり変わっているのにも気づかず、レーアは枕に頭を預けながら夫の方へと顔を向けた。

「朔の日は、店のほとんどが休みだ」

そんな彼女の多くの言葉は、ウリセスの冷静な言葉で轟沈することとなる。しかし、自分の愚かさに、ずぶずぶと冷たい海に沈みかけたレーアを、

「……分かった、近いうちに休みを取る」

隣からかけられた一言が、強い力で水面へと引き上げた。一瞬驚いた彼女だったが、目を大きく開いて隣に横たわるウリセスを見ると、いつも通りの、冗談とは無縁の表情だった。その表情のおかげで、逆に彼の言葉が真実のだと、レーアは強く感じる事が出

来た。

「それでいいか？」

「は、はい、ありがとうございます、ウリセス」

お世辞にも優しげとは言い難い彼の目の中に、確かに優しさを見つけてレーアは嬉しくなった。そのままジャンナのように、抱きついて嬉しさを伝えられればどんなにいいだろうかと思っただけ、恥ずかしさが上回って、実践することは出来ない。

そんなレーアにウリセスも話のキリがいいと思っただけ、「消すぞ」と一言伝えて燭台の灯りを消してしまう。

レーアは、せつかく水面に戻ったというのに——その夜、もう一度溺れる羽目となった。

## 2 冬を思う男

「冬朔とその翌日、休み取れますよ」

「いや、冬朔はいい。その翌日を休みとしてもらおう」

ウリセスは、補佐官のエルメーテ「バラッキと、冬季の仕事の打ち合わせついでに日程の調整をしていた。

「冬朔は通常より兵士の勤務数も少ないですし、連隊長閣下が訓練を指揮するほどの日ではありません。第一、僕は休みます」

連隊長室に机は二つ。奥にウリセス、扉側がエルメーテ。それ以外に、応接用のソファがある。補佐官との細かい打ち合わせは、たいていソファで行うことにしている。顔を突き合わせて話をする時は、この方が都合がいい。

神殿が作成している暦が、二人の間のテーブルの上に置かれている。エルメーテの愛用品であるそれには、多くのメモ書きが残されていた。

ウリセスの向かい側で、エルメーテが困ったように顔を歪めている。しかし、元の顔が柔和なせいで、大した迫力はない。ウリセスの普段の表情よりも、はるかに優しい顔と言っていいだろう。

外からは、走らされている兵士たちの掛け声が硝子窓越しに聞こえてくる。走って身体を温めるにはいい季節だと、ウリセスは無意識にそう考えていた。

「好きに休め」

意識的に考えるのは、補佐官への返事。エルメーテとは、まだそう長い付き合いではな

いが、ウリセスが休まなくとも彼はきつちり休んでいる。「〇日に、お休みいただきたいでもいいでしょうか？」というのが、彼の定番の確認方法だった。一般の兵士と違い、補佐官は上官の都合で細かく予定が変わるため、仕事が詰まっていない時にその都度休みを申請するという形になっている。

「上官である連隊長閣下も、好きに休んでもらわないと困るんですよ。上官が出勤してるのに補佐官が休みって、聞こえが悪いんですから」

エルメーテは、これまでのウリセスの休みについて、言いたいことがあったのだろう。いい機会とばかりに畳み掛けてくる。逆にこれまでの彼の言葉には、まだ遠慮が含まれていたのだと、今更ながらにウリセスは気づいた。

「それに、連隊長閣下は冬の生まれですよ。奥様が、大きなカブを買ったそうですよ。閣下にお祝いに食べて頂くと、張り切っていたそうです」

更に畳み掛ける言葉は、急に方向性を変えている。一体どこから妻の買い物情報まで手に入れてくるのかと、ウリセスは疑問の目でエルメーテを見ざるを得なかった。

「あ、コンテ夫人がうちの店で働いてるんです」

ウリセスの視線の意味を汲み取ったのか、彼はさっさと情報源を明らかにした。それに、ウリセスは簡単に納得した。なるほど、と。

レーアの母が料理屋で働いているのを彼は知っていたが、まさかエルメーテの家だとは思っておらず、世間は狭いものだと思を吐いた。

カブ。その野菜は、ウリセスにある記憶を呼び起こさせた。士官学校に行くまで——つまり彼が子供の頃、実家での冬朔の晩餐はいつもカブだった。北の神殿のタペストリーと同じ、白い野菜である。

「お前の皿には、カブを多く入れたよ」と、母親は毎年カブだらけのシチューをウリセスに差し出した。カブをさほど好きというわけではないが、彼がそれについて何か言ったことはない。黙って食べるだけだ。「男は食事に文句を言うな」と、祖父に厳しく躰けられていたせいである。

だからウリセスはカブという言葉を聞くと、まず最初にカブだらけのシチューという一番強烈な記憶が引き出される。よくもまあ、ひとつの皿にあれほど盛ったものだ、と。

「閣下は、結婚式以来、全然休みを取ってらっしゃらないじゃないですか。いくら管理職で、休みを自由に取りやすいからと言って、逆に全く取らないっていうのは馬……おかしなことです。たまには、奥様や妹さんと出かけるといいんじゃないですか。家族と仲良く買い物に出る連隊長……町の人の印象も、もう少し変わるでしょうし」

母親の記憶を辿っていたウリセスは、強い力でエルメーテに引き戻され、これでもかと言葉積み重ねられた。

ウリセスは、別にムキになって休みを取らないわけではない。戦場では、身体を休めるという意味での休みをたっぷり取れるほどの時間はほとんどなかった。逆に休戦後、都に戻ってから左遷が決まるまでは、褒賞休暇を与えられた。また閑職部署に放り込まれていたたので、休みが多過ぎて己の身を持って余すほどだった。その二つを体験した上で、自分は働いていた方が楽だという結論に辿り着いたのだ。

「書類の件は大丈夫です。十分間に合います。というわけで、異論がなければ連隊長閣下は、明日と明後日の二日間休みということで。せっかくですから、僕も連休をいただきます」

だがそんなウリセスも、休む段取りをここまでお膳立てされて、意固地になる理由もなかった。

「……分かった、ではそれで」

「分かっていただけで恐縮です。では、これからも定期的に休日を組ませていただきます。希望の日があればおっしゃってください」

ウリセスの短い返事に対し、言質は取ったとばかりに気がつけばエルメーテが休みを水増ししようとしていた。仕事以外に大して能のない自分のような男は、働いている方が人

のためになるだろうとウリセスは思ったが、その理屈は彼には通用しないようだ。

「有能な補佐官だな」

だから、少しの皮肉を込めてそう伝えたのだが、エルメーテはその目を極限まで細めてにっこりと笑ってこう言った。

「お褒<sup>ほ</sup>めにあずかり光榮です」

「明日と明後日が休みになった」

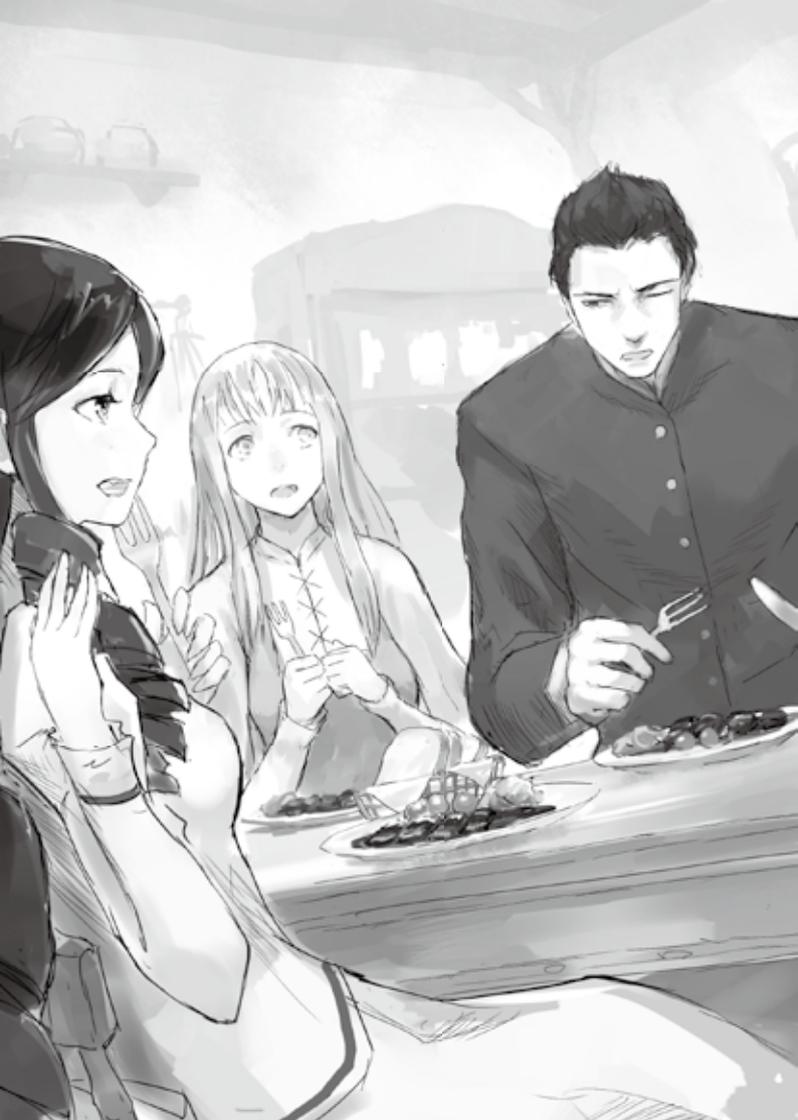
夕食の席でそう告げると、隣に座っているレーアは食事の手をぱっと止め、晴れやかな顔を彼に向けてきた。

「へえ、私に来てから休むの初めてじゃない？」

レーアの向かいのジャンナはと言えば、大袈裟<sup>おおげさ</sup>に驚いてみせる。「休むのは結婚式以来初めてだ」と細かく訂正してやる義理は、ウリセスにはなかった。更にジャンナがうるさくなるだけだと分かっていたからだ。

「分かりました。明日は神殿に行かれます？ ゆっくりなさいます？」

レーアもその訂正はせずに——というよりは、もはや休みのことで頭がいっぱいなのか、嬉しそうな顔で隣のウリセスを見つめてくる。明日、すなわち冬朔の予定を確認するその



声は、小さいながらも弾んでいた。

「神殿に行きたいのか？」

元々ウリセスは、この休みを自分のものとして使うつもりはなかった。だから、妻に希望を聞くことにしたのである。これまで彼は、まとまった時間を家のために使ったことはなかった。

「私は行かないわ。もうお菓子がもらえる年じゃないし、冬朔はもともと私には関係ないしね……お店だつてやってないでしょう？」

しかし、のんびりとした気性のレーアが考えて答えを出すよりも、ジャンナの口の方が倍以上速かった。アロ家の人間はみな、いまひとつ信心深くない。祖父が、神に祈る性質ではないからだろう。兄のランベルトもウリセス自身も、願うより動く派だった。ジャンナもまたご多分に漏れず、神殿とは子供が菓子をもらうだけの場所ぐらいの感覚なのだろう。

「私は……」

ジャンナの早口に押されたのか。レーアはそこまでするつと言葉を出したものの、その後が続かない。言いかけたまま止まって、何か考えている。物凄く行きたいというほどではないという、微妙なところで揺れ動いているのかもしれない。

「行くか？」

ただ、行かないと決断したにしては考えが長かった。だから、ウリセスは肯定的に問い直す。否定的な問いかけだと、彼女が自分の希望を引っ返めてしまいそうに感じたのだ。

「じゃあ、午前中に少しだけ……いいですか？」

そんな彼の呼び水に引っ張られ、レーアがやっと答えを出した。

「ああ」

豊年祭の時、一緒に神殿に行く予定を台無しにしてしまったウリセスとしては、これくらいはお安い御用だった。こんなことで埋め合わせが出来るとは、思ってもいなかったが。これで冬朔の予定が決定し、穏やかな夕食の時間が続くと思われた矢先。

「兄さんも、もうお菓子はもらえないんだからね」

ジャンナがニヤニヤしながら、兄をからかってくる。ウリセスがジロツと視線を向けると、慌ててあらぬ方を見た。

「冬服がいるんじゃないのか？」

ウリセスは軽い脅しを言葉に込めたが、「女性にそんな脅迫をしていいのかしら？ あ、二日も休みだったわね。二日目にしましょ」と、まったく気にしていない澄ました顔で、ジャンナはさっさと己の予定をねじ込んだ。レーアに言われていたので元々その予定だっ

だが、当たり前のように持つていかれると、ウリセスとしてもやはり少しばかり面白くない。

兄妹の間でバチッと視線の火花が散る。そんな彼らを見て、レーアがふふふと微笑んでいた。

ウリセスは風呂に入つてさっぱりした身体で寝台に入った。祭日の前の日だからと、レーアが風呂の支度をしてくれていたのだ。

「明日から冬になりますね」

人の都合で決めた季節の線でも見えるかのように、レーアがそんなことを言葉にしながら、寝台の隣に潜りこんでくる。寒くなるというのに、何故か嬉しそうだ。

「冬が好きなのか？」

ウリセスの素朴な疑問に、レーアが一瞬きよんとした顔をする。まだ燭台を消していなかったからこそ、見えた表情だった。

「ええと……そうですね、今年から好きになりました」

その顔が、ゆっくりと笑顔に崩れていく。

何か、冬が好きになるようなことでもあったのだろうかとウリセスは考えるが、分かるはずもなかった。ただ、自分が生まれた季節を好きだと言われるのが嫌なはずもなく、

「そうか」とだけ返した。

レーアが生まれたのは春季だという。ウリセスにとって春とは、異動の季節でもあるため、あまり楽しい思い出はない。これまでの経験上、都合の良い異動というものをしたことがなかった。左遷されたのも、今年の春だ。

「消すぞ」

「はい……」

だが、次の春からは好きになれそうだった。

### 3 冬を迎えた女

冬朔の朝は、その名に相応しい冷え込みだった。冬の盛りと比べるとまだまだ弱いものだが、秋季を過ごしてきた人間にとっては、とても寒く感じる。

しかし、レーアはそんな寒さも気にすることなく、夫と自分の外套を用意して、いそいそと出かける準備を済ませた。手袋や襟巻きはさすがにまだ大袈裟だろうと、置いていくことにする。

「いつてらっしやい」

ウリセスと二人で玄関から出るところをジャンナに見送られるのは、これが初めてのことであった。見慣れない、少しくすぐりたい光景だとレーアは思った。

「鍵は閉めてね。知らない人が来ても開けちゃ駄目ですからね」

「分かっているわよもう。義姉さんが買い物行ってる時だって、ちゃんと守ってるでしょ」  
照れ隠しと心配の両方を抱えたレーアは、振り返ってジャンナに声をかけるが、子供扱  
いされたことに腹を立てた彼女に逆に噛み付かれる。そんな彼女の声に追い立てられるよ  
うに、レーアはウリセスと家を出た。

冷えた朝の空気の中、二人で歩き始める。お天気は、いまひとつはっきりしない曇り。  
晴れそうであり、もつと雲が厚くなりそうでもある、どっちつかずの曖昧な空。

レーアは、そんな微妙な天気を見上げることはしなかった。それよりも、彼女が気にす  
べきは地面だった。いつもより少しばかり、足元がふわふわしている気がした。

初めて二人で出かけることに、浮かれてしまっているのだ。一緒に家に帰ってきたこと  
さえ、まだ二回しかない。結婚式の後に手を握って帰った時と、豊年祭の後、泣きながら  
手を引かれて帰った時。

思えば、ウリセスと帰る時は、二度とも手を握ってもらっていた。それを思い出すと、

少しレーアは恥ずかしく思う。普通の夫婦というものは、あんな風に外で手を握ることは  
少ない。勿論、結婚式のしきたりは別だったが。

ちらりと隣を見上げると、彼の身体はレーアより少し前に出かかっていた。脚の長さが  
違うため、歩幅に差が出る。更に、足を動かす速度も圧倒的に違う。彼が普通に歩くだけ  
で、レーアは簡単に置いて行かれるだろう。

「あ、あのつ、ウリセス。腕を貸していただけませんか？」

それが寂しくて、レーアは夫にそう告げた。こんなお願いが出来るのは、夫が家族くら  
いしかない。そしてここには、ウリセスという彼女の夫がいる。いま彼に頼まずして、い  
つ誰に頼むというのか。

「あ、ああ……」

少しの間が空いた後、彼女の意図に気づいたようで、ウリセスは左肘を彼女の方へと出  
した。「ありがとうございます」と、レーアは嬉しさを隠さずにその腕に手をかける。

最初の十数歩は、うまく息と歩幅が合わず、引つ張られそうになったり遅くなりすぎた  
りした。それが、次第に同じ速度になっていく。そしてついに、最初からそうだったかの  
ように、一緒に歩く姿を二人で作り上げることに成功する。

その何とも言えない小さな充実感に、レーアはいまの自分がとても幸せだと感じた。

冬朔の午前中の神殿は、多くの子供連れでごったがえしていた。これから行われる祭日の礼拝が終わったら、またひとつ年を重ねた子供らにお菓子が配られるからだ。

とはいうものの、連れられている子供は、大体一人。多くて二人。誕生季でない子供は、神殿に行きたがらないせいだ。子供にとつて神官のお説教は、退屈でつまらないものだろう。お菓子というご褒美があるからこそ、誕生季の朔の日は彼らにとつて特別な意味がある。

事実、子供の頃レーアとセヴエーロが東の神殿に出かける時、イレネオは「オレ関係ないもん」と、家でふてくされていたものだ。その代わり、夏には母親の手を強く引つ張って出かけて行った。

子供の甲高い声が響く神殿に、レーアは夫と二人で足を踏み入れる。新たに誰かが入ってくると、余程話にならないうりやうに限り、知り合いかどうかを確認するために、みなちらりと入り口を見るものだ。その視線は、すぐに通り過ぎる予定だった。

だが、神殿の中は一気に静かになった。小さな子供たち以外の、特に大人たちの話し声が一瞬完全に途切れる。静謐な神殿の空気が届いたせいかな——なんて、お花畑なことを考えかけた自分の頭を、彼女は殴りたかった。大人たちは、ぎよつとした顔でウリセスを見

ていたし、子供たちの一部もそれに釣られるように固まっていたというのに。

ああ、とレーアは、夫の肘にかけた手を震わせた。

ウリセスについての悪い噂は少しずつ薄れている、と兄弟からは聞いていたが、それでもまだ根強く残っていることを、彼らの表情で思い知ったのである。

一緒に神殿に行きたい。豊年祭で出来なかつたことをしたいと思つた自分の気持ちが、ウリセスの害になつたのではないかと、レーアが後悔しかけた時。

「連隊長閣下！」

神殿の奥から、がっしりした青年が早足で近づいてきた。腕には三歳くらいの男の子を抱えている。

「今日は軍服をお召しではないので、一瞬分かりませんでした。あつ、ええと俺は……」

「エツトレバツ……」

ウリセスが、静かに彼の名を口にする。青年はきよんとした後、たまらないほどの笑顔になる。

「名前を覚えていただいて光栄です！ あ、これうちの長男のブレロです。ほら、ブレロ。お父さんに剣を教えてください、一番強い人だぞ。お前の夢に出たオバケだって、簡単に倒しちゃうぞ」

その笑顔は明るい声を引き出し、抱えた子供をウリセスへと近づけさせた。子供はよく分かっているように、目の前のウリセスを見上げている。

「良かったら、ブレロを撫でていただけませんか？ 俺の子供の頃に似て、すごい弱虫で困ってるんですよ」

「よあむしじゃないっ」

舌たらずな言葉とともに、小さな拳がぼかりと父の胸を打つ。それに笑う青年。  
そんな子供の頭に、ぼんぼんと、大きなウリセスの手が乗る。

「俺も弱虫だった……大丈夫だ。男は最初から強く生まれるんじゃない……強くなりたいと思ってるかどうかな」

大人の普通の言葉で、彼はそう子供に語りかける。小さな子に、その意味が伝わることはないだろう。

「あつ、ありがとうございます」

だが、父親には十分伝わったようだ。「良かったな」と、嬉しそうに子供を抱え直している。そんな親子の後ろから、

「あ、あのお……閣下、すみません、良かったらうちの子たちにも……」

両腕に、双子の男の子を一人ずつ抱えた青年が、申し訳なきように顔を出した。

「何だよ、ベナツシ。真似すんなよ」

「真似じゃねえよ、俺だって行こうと思ってたのに、お前が先に飛び出すから……っっていうか名前言うなよ。俺だって、閣下に名前当ててもらいたかったんだから」

ああ。

レーアは、唇を噛み締めた。泣きそうだったのだ。神殿の中で消えていた音は、いつの間にか戻ってきている。人々は、何事もなかったかのように雑談に戻っていた。

「ベナツシアツカルド、だったな。視察の時は、よく働いてくれた」

人の声の溢れる中、ウリセスが目の前で小突き合う男の一人に、そう語りかける。  
「いやあ、光栄です。あの時は土砂崩れに野盗にと、本当に大変でしたね」

レーアの心配など、杞憂だった。ウリセスのことをよく知らないままに嫌っている人がいたとしても、知っている人はこうして彼を慕ってくれるのだ。こんな光景が広がっていかば、だんだん悪い噂も消えていくだろう。

ウリセスが誠実に、まっすぐ部下と向き合っている何よりの証拠だった。

「双子か？」

「はい、自慢の息子たちです！」

「そうか……元気に育てよ」

レーアは夫の穏やかな横顔を見上げ、こみ上げてくる熱い気持ちを呑み下したのだった。

#### 4 冬を歩いた女

冬朔の礼拝は終わったが、まだ誰も帰ろうとはしない。

これから子供たちが神官からお菓子をもらう大事な儀式があり、我慢出来ずに早速席から飛び出してきた子供の流れを、邪魔してしまうかもしれないからだ。大人はそれを分かっているの、穏やかに子供たちを見守っている。

レーアもウリセスと長椅子に並んで座ったまま、そんな光景を見ていた。自分で並ぶ子供もいれば、まだ小さくて親に抱っこされて並ぶ子もいる。やっと退屈な礼拝が終わり、子供たちは一番楽しみにしていた時間が待ちきれないという笑みを浮かべている。

先頭の、大きめの子が元氣よく自分の名を名乗る。一人で列に並ぶには、これが出来るのが条件だ。町の戸籍は神殿が管理していて、町民の誕生日や年齢はきちんと記録されている。誰にお菓子を配るかを神殿は把握しており、渡すたびに名簿にしるしをつけていく。

レーアはいつも小さな声で名乗っていたので、神官に聞き直されることもしばしばだった。セヴェーロは、更に小さな声だった。

ウリセスに撫でもらった子たちもお菓子の袋を握り、嬉しそうに父親に抱えられて帰っていく。席の横を通り過ぎる時に挨拶されたので、レーアは慌てて「お誕生季おめでとうございます」と、小さな声で返した。

自分で歩く子供たちは、お菓子の袋を掲げて踊るような足取りで神殿を飛び出して、その後を親が追って行く。「待ちなさい」「お前のお菓子何?」「同じだよ」「そっちのが多い」「ほら前見て歩きなさい」「おんなじだつてば」——はしゃぐ声と親の制する声が響く。その幸せな列が終わった後に、礼拝に参加していた大人たちがゆっくりと帰り始める。

ウリセスも、膝の上に載せていた外套を掴んで立ち上がり、隣のレーアに手を差し出した。彼女もまた外套を抱え、夫の手を取って立ちあがる。

一つ前の秋朔には、いまの自分の姿を想像も出来なかったと、レーアは感慨深く思った。結婚というものは、こんなに劇的に日常生活を変えるものなのかと、改めて驚いていた。神殿を出ると、空の雲はだいたい薄れていて、明るくなっていた。寒さもそれほどではなく、外套を着込むかどうかレーアが考えていると、ウリセスはさっさとそれを右腕にかけてしまった。もはや袖を通す気はないようだ。

「歩いていけば、温かくなりますね」

レーアも左腕に外套をかけ、空いた右手をウリセスの腕に伸ばす。

「そうだな」

言葉少なに、でもきちんと返事をしてくれる。そんな些細なやりとりでも、レーアは幸せだった。行きと同じ道のりを、レーアの歩幅で一緒に歩く。そこにはもはや、朝ほどのぎこちなさはなかった。

「カブを買ったそうだな」

「え？ ジャンナが言ったんですか？」

一昨日、冬朔の日は仕事をすると言われ、言い出しにくくてカブの話は出来ていなかった。昨日は、冬朔とその翌日が休みと聞き、嬉しくてやっぱりカブの話までは至らなかった。

「いや……エルメーテリバラッキを覚えてるか？」

「忘れるはずはありません。麦の穂を持ってきてくださった、ウリセスの補佐官の方ですよね」

レーアは、すぐに反応した。思考速度がそれほど早くない彼女であっても、豊年祭の出

来事は、いまなお昨日のことのように思い出される。しかし、その名とカブのつながりは分からない。

「彼の家が料理屋をしていることは？」

「知ってます。母が働いて……あつ、やつと分かりました。一昨日、カブを買った後で母と偶然会ったんです。何で補佐官の方が、カブを買ったことを知ってらっしゃるのかと……」

予想外の組み合わせがうまく結合したのがおかしくて、レーアは小さく笑った。

「知っていたのか」

「ええ、豊年祭の前日に、セヴェーロと一緒にうちを訪ねて来てくださって、紹介された時に分かりま……あ、この話はしていませんでしたっけ」

あの祭りの前日。仕事で遠出をしていたウリセスが戻らず、不安な気持ちの真っ只中にいたところに、あのウリセスの補佐官が訪ねて来てくれた。そのことを今更ながらに思い出して、レーアはあつと思った。ごたごたしていたため、ウリセスにその話をするのをすっかり忘れていたのだ。

「ああ、そういえば来たと言っていたな……何をしに来た？」

しかし、彼に怒っている素振りはなかった。ただ、多少怪訝そうではあったが。

「ウリセスの帰りが、豊年祭当日になるだろうということを伝えるに……それと」  
ウリセスの腕にかけている手に少し力を込めると、彼がレーアの方へと視線を落とす。  
彼女もまた、そんな夫を見上げる。

「それと……ウリセスの視察での仕事ぶりが、とても立派だったとおっしゃってくださいました」

どうして、こんな大事なことを伝え忘れていたのかと、レーアは己の記憶力の乏しさに顔を赤らめ、再び視線を落とした。

エルメーテという男は、別にこのことを上官であるウリセスに知って欲しいと思つてゐるわけではないだろう。それは、レーアにも分かる。けれど、ウリセスの仕事ぶりを理解し、そして評価してくれる人の話は、彼自身にも聞いて欲しかった。味方はちゃんといふ。今日、神殿でウリセスを慕う人たちがいたように。

「……」

ウリセスは、すぐには返事をしなかった。視線を前に戻して、そして少し下に落とした後、再びまっすぐ前を向く。

「エルメーテの両親が……『新実の儀』に出なかつたらしくてな。そんな経験のせいかな、祭りに俺が間に合うようにと色々と心を砕いてくれた……細やかな男だ」

淡々と言葉を紡ぎながら、ウリセスの濃い茶の瞳が、穏やかに細められる。男同士の間にある、レーアには踏み込めない信頼の糸が、彼女の前に浮かび上がってくる気がした。

「新実の儀」——それは結婚一年目の夫婦が、神官の祈りと共に子宝を象徴する一穂の麦を授けられる豊年祭の儀式のことだ。

「そうだったんですか……本当に良い方なのですな」

エルメーテへの羨望を消せないまま、それでも部下を褒める夫が誇らしくもあり、レーアもその緑の目を細める。

その後も、補佐官のおかげで連休が取れたことなどを話しながら、二人は楽しく我が家へと帰りついたのだった。

「……開いている」

レーアは玄関の前でウリセスの腕から手を離し、夫が扉を開けるのを待っていた。

いつもそうしているのか、鍵を差し込む前に、ウリセスは扉の取っ手に手をかけた。それが、何の抵抗もなくすんなりと回ったのだ。

「あら？」

つい彼女も、不思議な声を出してしまった。朝、あれほどちゃんと戸締りをするように、

ジャンナに言ったというのに。

一瞬だけ、二人は視線を合わせる。ウリセスの目は、いつもとは違う険しい色を浮かべていた。彼はそのまな顔を前に戻して扉を開け、何も言わずに家の中へと踏み込んだ。静かなアロ家の玄関先に、人の気配はない。

「ジャンナ！」

ウリセスが視線を巡らせて、よく通る大きな声で静かな空気を引き裂いた。  
刹那。

ガチャンだのバタンだの、複数の大きな音が入り乱れた。そして、バタバタと大きな足音がひとつ二人の方へ、近づいて来る。それは、とてもジャンナのものとは思えなかった。音に弾かれるようにウリセスは、ついてきたレーアを後ろ手に自分の陰へと押し込んだ。そのためレーアの視界は半分以上、彼の大きな背中中で遮られた。

「義兄上！ お、お邪魔してます！」

台所につながる廊下から飛び出してきたのは——セヴェーロだった。レーアの目の前にあるウリセスの身体が、一瞬完全に動きを止める。

「俺もいまーす！」

姿は見えないものの、奥からイレネオの声も聞こえてきた。ついで、鍋のふたらしきも

のが落ちて床で円を描く音。ウリセスの肩の力が明らかに抜ける。

「知ってる人だったから、開けてよかったでしょー!？」

やはり姿が見えないままのジャンナが張り上げた声も、玄関まで届く。最後には深い吐息と共に、ウリセスはレーアの前からどいた。やっと開ける彼女の視界。

二人を驚かせたアロ家とコンテ家の弟妹たちの様子に、レーアはどう反応したらいいのか分からないまま、まばたきを三度繰り返したのだった。

## 5 冬を迎えた男

「ふ、冬は義兄上の誕生季だと聞いて！」

「カブは姉さんが買ったついでから。昨日買った白菜を差し入れに来たのがセヴェーロ。俺は塩漬け肉。塩漬け肉に季節はありません、万能です！」

コンテ家の第二人が、薄く開いた台所の扉の前で互いをちらちら見ながら、口早に訪問の理由を告げる。主が不在の間に勝手に中に入ったことを、咎められるとも思っているかのよう。